Osaka University Knowledge Archive

Title	朗詠注と太子伝における「仏法最初の釈迦像」譚
Author(s)	中川, 真弓
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2003, 37, p. 19-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47937
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

朗詠注と太子伝における「仏法最初の釈迦像」譚

中川　真弓

はじめに

中世には数多くの注釈書が作られた。『和漢朗詠集』の注釈書（以下、朗詠注）や『聖徳太子伝暦』を対象とした注釈書（以下、太子伝）はその代表的なものであり、そこには中世に喧伝された言説の影響を見ることができる。その中には、嵯峨清涼寺本尊の縁起として知られる釈迦栴檀像譚も含まれている。この話は「仏法最初の釈迦像」としても語られるもので、中世においては栴檀像のその性質が「二伝」という語彙で表現されたこともある。(1) その一方で、太子伝においては、別の釈迦像に対して「二伝」と表し、新たに「仏法最初」として仏法史上に位置づけようとする記述が見える。本稿では、中世の注釈書の中で様々な言説が交錯し、あるいは融合して、新たな言説が生み出されてゆく一つの過程について考察を試みたい。

一　太子八歳条と「仏法最初の釈迦像」

『聖徳太子伝暦』（以下、『伝暦』）太子八歳条には、敏達天皇八年（五七九）冬十月、新羅国から釈迦の仏像が贈られたことが記されている。(2)

八年己亥冬十月。新羅国献二送仏像一。太子令二皇子奏一曰。西国聖人釈迦牟尼仏遺像。末世尊レ之。則消レ禍蒙レ福。蔑レ之。則招レ災縮レ寿。児読二仏経一。其旨微妙。望也崇二貴仏像一。如レ説修行。天皇大悦。安置供養。今在二興福寺東金堂一。

右の『伝暦』を核として、文保本系『聖徳太子伝』（以下、『太子伝』）は、太子八歳条に、新羅国の大王から「金銅釈迦三尊」が献じられたと記す。この時、物部守屋は贈られた仏像を崇拝することに反対して、そのまま宮中を退出してしまう。以降、『太子伝』において、守屋は仏敵として描かれるようになる。これに対し、太子は、釈迦如来および釈迦像の尊さについて次のように人々に説く。

…猶為レ利二滅後ノ衆生一移二留メ御身ヲ於金銅ノ聖容一給キ。而ニ如来滅後一千余年ノ間ハ、留テ天竺一代ニテ生身ノ如来ニ施シ利益ヲ給ケリ。其後渡テ震旦新羅国ニ四百余才也。阿児先生於テ衡山ニ奉レ崇多生本尊也。如レ此天竺震旦押並国王大臣一レニシテ心ヲ所レ奉二崇敬一シ、南閻浮提第一ノ霊像也。而ルニ今得テ仏法東漸之時ヲ、照二臨吾朝ニ給事歎喜之至リ、何事カ如レ之耶。…其後大和ノ国ニ建テ大伽藍ヲ、名ケ元興寺ト奉ケリ安二置彼三尊ヲ也。而モ太子御入滅後五十年ノ比、人王卅九代天智天皇御宇ニ大織冠之嫡男淡海公不比等、於二南都一被レシ建二立興福寺ヲ之時、奉レ迎二元興寺ノ尺迦（ヲ）三

尊、奉レ居二東金堂ノ正面ノ本尊丈六金銅薬師如来之御前一ニ給ケレハ、…仏法最初ノ尺迦像ト申ハ是也。

一、従二百済国一送文云、謹東海州奉レ渡二　釈迦文仏三尊像一。

夫彼仏像之因位ヲ尋レハ二月支一ニ者、中天竺国浄飯大王之太子、摩耶夫人之所生也。…随類応同之利生已ニ尽テ、告ヨリ双林之入滅ヲ於人天一ニ以後、為メニ滅後ノ利生ノ生身ノ二伝ヲ所レ奉レ移新仏之像也。天竺震旦之利益歳久シ、而モ今マ任テ二東土利生之仏意一ニ所レ奉レ渡也。日本ノ国王大臣、何以テカ不二信敬セ一哉ヤ。

（醍醐寺本『太子伝』八歳条。句読点は私に施した部分がある。）(3)

釈迦は、滅後の衆生に利益を施すため、自らを「金銅の聖容」に「移し留め」た。この金銅の仏像は、釈迦滅後の一千余年間、天竺で「生身の如来（＝釈迦）」に代わって利益を施し、その後、震旦・新羅国に渡って四百余年を過ごした。聖徳太子は、この仏像は「阿児（＝太子の自称）」が前生において崇めていた像であるとして、自身との深い因縁を語る。そして、「南閻浮提第一の霊像」が、今まさに仏法東漸の時を得て本朝に渡来したことは僥倖であると説き、天皇をはじめ宮中の人々に仏像を拝むことを納得させた。この像は、大和国の元興寺（現在の飛鳥寺）に安置され、さらに太子の亡後には、南都に建立された興福寺の東金堂に迎えられた。

この太子八歳条の内容で注目されるのは、新羅国から贈られた金銅釈迦（三尊）像が、「仏法最初の尺迦像」であると述べられている点である。天竺で釈迦本人が姿を留めたとする文脈は、確かに「仏法最初」という主張と矛盾しない。しかし、『太子伝』は、太子八歳条に最初の釈迦像についての記述を載せる一方で、太子二十四歳条には、生前の釈迦の姿を優塡王が模刻させたという、いわゆる栴檀像譚を引用する。(4) つまり、『太子伝』の中では、「最初」

に造られたとされる釈迦像譚が二つ存在することになるのである。この太子八歳条と二十四歳条の関係を考察するために、次節では太子二十四歳条に載せられる栴檀像譚について検討を加える。

二　太子二十四歳条と朗詠注における釈迦栴檀像譚の展開

太子二十四歳条には、淡路島に赤栴檀の浮木が漂着したことが記されている。太子はこれが釈迦在世中に初めて仏像が造られた時に用いられた霊木であると説明する。そして、『太子伝』はそれにまつわる栴檀像譚を引用する。

…是嵯峨釈迦ノ御事也。A昔釈迦如来卅七歳ニシテ為二御母摩耶夫人ノ報恩一、上二忉利天一、一夏九旬之間説法、摩訶摩耶経是也。…於中于塡王殊ニ奉恋如来、以赤栴檀刻尊像欲奉拝之、…三十二相円満シテ究天工、宛如生身ノ如来也。…B其後一千三百五年、西晋ノ代、西天ノ鳩摩羅琰、負二彼栴檀ノ仏像一赴二震旦一、…（已上見仏像記也）C此ノ像為二漢土ノ重宝一王臣ノ崇礼異レ他、是ヲ以テ本朝ノ裔然法師入唐ノ時ニ模二刻此像一渡二日域一也、今ノ嵯峨釈迦是也。D朗詠ニ、昔シ忉利天安居九十日、刻二赤栴檀一而模二尊容一、今跋提河滅度二千年、瑩二紫磨金一而礼二両足一（已上）、此ハ正暦二年三月廿八日ニ、仁康上人於河原院被行五時講願文之句也。作者匡衡、其時弾正弼也。保胤入道至此句不堪感、叩匡衡ノ背云ク、江生々々筆コソ至ニケレト称美スト云々。

（醍醐寺本『太子伝』二十四歳条。句読点は私に施した部分がある。）

右の栴檀像譚は、A天竺での優塡王造像譚、B西域亀茲国・震旦への伝来、C裔然による本朝将来、D「朗詠」の記事で構成される。以下、この栴檀像譚の生成過程について確認しておきたい。最初に、『増一阿含経』等に見ら

れる栴檀像譚の梗概を示す。

釈迦は、母摩耶夫人の恩に報じるため、夏安居の間、忉利天へ昇って説法をおこなった。地上における釈迦の不在を嘆いた優塡王は、毘首羯摩天の助けを借りて、釈迦の姿を模刻した像を栴檀の木を用いて造らせた。その後、忉利天から帰還した釈迦を地上で出迎えた栴檀像は、釈迦から滅後の衆生を託される。

以上が仏像起源説話とも言うべき栴檀像譚であるが、天竺・震旦にかけて、この優塡王が造らせたとされる釈迦像は格別に尊崇された。それはこの像が「最初の仏像」とされ、在世中の釈迦の真容を留めているという至上の価値をもつとみなされたからであった。(5)

本朝においては、栴檀像譚は嵯峨清涼寺釈迦如来像の縁起として語られるようになる。清涼寺釈迦像は、渡宋した東大寺僧奝然（九三八―一〇一六）が、伝優塡王所造栴檀像を模刻し、永延元年（九八七）本朝に将来したものである。その経緯は『優塡王所造栴檀釈迦瑞像歴記』(6)（以下、『瑞像歴記』）に詳しい。『瑞像歴記』には、栴檀像の造立に関する諸説が仏典等から引用されており、さらに栴檀像が天竺から西域を経て震旦に運ばれた事情等が記されている。この資料は、奝然に随行した弟子盛算が書写して日本に持ち帰ったものであり、奝然の模刻の経緯が追加されている。それを含め、『瑞像歴記』は、後に清涼寺釈迦像譚が展開していく上で大きな影響を及ぼした。天竺・震旦の栴檀像譚に日本の清涼寺釈迦像に関する事柄が加わって、栴檀像譚は新たな展開を見せるのである。

また、栴檀像譚を典拠とした詩句を載せる『和漢朗詠集』は、栴檀像譚の展開において一つの流れを生じさせる源となった。(7)『太子伝』の二十四歳条が引く栴檀像譚もこの系譜にある。

昔忉利天安居九十日　刻赤栴檀而模尊容
今抜提河滅度二千年　治紫磨金而礼両足　仁康上人奉造丈六釈迦願文　匡衡

（『和漢朗詠集』巻下・仏事）

右の詩句は、大江匡衡（九五二―一〇一二）による「為二仁康上人一修二五時講一願文」（『本朝文粋』巻十三・四一〇）を典拠とする。対句の前半は栴檀像譚を題材とし、後半は仁康上人の五時講で仏像が供養されたことを述べたものである。平安末期から鎌倉時代にかけて、この詩句を対象とした朗詠注は次第に展開していく。

件句、後中書王殊加褒誉、自書其由給云々、自此匡衡之文鼓動於天下云々　（『朗詠江注』下・仏事・六〇五）

いわゆる『朗詠江注』は、匡衡の子孫である大江匡房（一〇四一―一一一一）が注を施したもので、匡衡の文を後中書王すなわち具平親王（九六四―一〇〇九）が殊に称讃したとする。一方、同じ匡房による言説を記した『江談抄』にも、この詩句に対する注が見えるが、『江注』とは記述が異なる。

此句、仁康上人①入唐之時、為母②於六波羅密寺供養仏経之願文也。講筵参会貴賤済々焉。講畢、集会人皆悉令散之間、保胤入道猶留、到俗客座、叩匡衡背云、弼殿筆リケリ云々。于時匡衡弾正弼也。在此講席之故也。又入道陳云、依如是不出文場也。見此句作骨心有攀縁。且為菩提之妨云々。　（『江談抄』第六・一五）

『江談抄』は、この句について、仁康上人が①「入唐の時、母のために」、②「六波羅密寺」において仏経を供養した際の願文に基づくものであるとする。典拠となった『本朝文粋』によれば、これは「五時講」の際の願文であ

り、行われた場所は「河原院」であるので、この部分は『江談抄』の誤りである。また、匡衡の願文を称讃した人物は、「保胤入道」すなわち慶滋保胤とされている。(8) この一部誤りを含む『江談抄』の記述は、『本朝文粋』において、栴檀像譚を典拠とした句を含む匡衡作の願文（四一〇）の次に、栴檀像と関わりの深い裔然を願主として書かれた保胤作「裔然上人入唐時為レ母修レ善願文」（四一一）が載せられているという事情が関係している。保胤作の願文は、裔然が①「入唐の時、母のために」、②「六波羅密寺」で法会を行った際に作られたものであった。しかし、その後の朗詠注では、『江談抄』に記された「内記入道保胤」が継承されていくことになる。

さらに応保元年（一一六一）成立の『和漢朗詠集私注』や平安末期成立とされる『和漢朗詠註抄』になると、前半の詩句の注として、その典拠となった栴檀像譚が加えられる。『和漢朗詠註抄』では、『江談抄』にも見られた匡衡願文と保胤願文の混同を反映した文章となっている。

仁康上人奉レ造二丈六ノ釈迦願文。江匡衡。A釈迦如来為レ報二摩耶恩昇二忉利天一歴二九十日ノ間一。于闐国ノ王恋慕シテ請二天工一、以二赤栴檀一刻二如来ノ像一。又曰、如来ノ年八十一ニシテ入下滅シ玉フ於跋提河西沙羅林ノ下ニ上。D仁康上人造顕シテ供二養丈六釈迦像ヲ一。匡衡造二願文一。内記入道寂心交二衆中ニ一聴二聞之一。講師披二願文一及三其読二此句一、寂心上人跳出曰、江生々々、文太タ飛テ羅二列ス介甫ニ一。匡衡大ニ驚云々。（『和漢朗詠集私注』仏事・四二五）

D此句者、仁康上人入唐之時、正暦二年三月廿八日於川原院或六ハラ蜜為母奉造金色丈六釈迦像一、供養并行五時講之日ノ願文也。講筵集会貴賤済々タリ焉。導師読之、作者在座。保胤入道又在テ聴衆中ニ一、読此句ヲ之時、保胤入道不ス耐タエ感歎ニ一跳リ出テ、叩テ匡衡背ヲ云、江生々々文コソ左飛羅礼介礼。匡衡大驚ク云々。A釈迦如来成道之後、至第八

年ニ為メ報カ母ノ恩ヲ、生年卅七之夏、昇テ忉利天ニ説玉フ摩訶摩耶経ヲ。其間九十日也。尓時ニ于塡王恋暮シテ以テ赤栴檀ニ欲ス刻ト如来像ヲ。于時毗首羯磨化作シテ人形ニ来下モ人中ニ為ニ王ノ作之ニ云々。…

（『和漢朗詠註抄』仏事・三八五）

鎌倉前期頃成立とされる『和漢朗詠集永済注』（以下、永済注）になると、さらに西域亀茲国・震旦への伝来と、奝然による本朝将来の話が付加される。

D此ハ、正暦二年三月廿八日、仁康上人、河原院ニテ、五時講ヲコナヒケル願文ニカケルナリ。…A上句ハ、尺迦如来、生年卅七年ノトシ、母摩耶夫人ノ恩ヲ報セムトテ、忉利天ニノホリテ、一夏九旬ノアヒタ、法リヲ説キ給ヒキ。…B其後、一千三百五年ヲスキテ、西晋ノ代ニアタリテ、西天ノ梵士、鳩摩羅琰此ニハ云童寿ト人、カノ于塡王ノツクリタマヘル瑞像ヲ、オイタテマツリテ、ハルカニ震旦ニオモムキケリ。…已上瑞像記ニミヘタリ。C此像、ツヒニ漢土ノ宝物トシテ、奝然法橋、入唐ノトキ奉拝之。即、其像ヲウツシツクリテ、此朝ニワタス。今ノ嵯峨ノ尺迦、是也。…

（『和漢朗詠集永済注』四二二）

Bの末尾に「已上瑞像記ニミヘタリ」とあるように、『永済注』の記事は『瑞像歴記』を源泉とする。またCでは、入宋した奝然が栴檀像を模刻して本朝に将来したことを述べる。このように、『永済注』では、栴檀像譚が清涼寺釈迦像の縁起へと結び付いている。先述した『太子伝』二十四歳条は、この『永済注』を典拠として清涼寺栴檀像譚を載せる。文保本系『太子伝』の中でも、日光山輪王寺本は『永済注』の本文に近く、構成も同じであるが、醍醐

寺本では、『永済注』の文章を組み替えて、A・B・Cと並べ、最後に『朗詠集』の詩句を含めたDを紹介するという時間軸に沿った構成をとる。醍醐寺本のこの記述の順番は、次に取り上げる『宝物集』と同じである。

三　「仏法最初の釈迦像」譚の仕組み

平安末期から鎌倉時代にかけて、様々な言説の中に清涼寺釈迦像譚が記されるようになる。その一つである『宝物集』は、清涼寺釈迦堂を物語の舞台として、「寺僧」が本尊の由来を語るという設定で栴檀像譚を載せる。

…裔然悦て移し奉る程に、栴檀の仏、夢中に裔然に告てのたまはく「我東土の衆生を利益すべき願あり。我を渡すべし」と仰られければ、裔然心付て、あたらしく造り参らせたる仏を、煙にてふすべまいらせて、栴檀の仏に取かへ奉りて、渡しまいらせたる」とぞ申ためる。さては二伝の仏にこそおはしますなれ。…

伝記に、大江正衡が、河原の院（光長寺本「六波羅寺」・身延抜書本「六波羅蜜寺」）にて、

昔忉利天安居九十日　刻赤栴檀而模尊容　今抜提河滅度二千年　治紫磨金而礼両足

と書も、此御仏のことぞかしと思ひ出られて哀なり。内記上人のほめけるも理にぞ侍る。

（第二種七巻本系吉川本『宝物集』）

『宝物集』は、栴檀像譚を天竺から始め、震旦・本朝へと展開する。この『宝物集』の栴檀像譚については、先行研究において宮田寿栄氏や中島秀典氏が[9]、その内容を分割し、各部の典拠・要素を検討された。その結果、両氏とも、『宝物集』の記述の背景に、朗詠注や太子伝があることを指摘されている。また、『宝物集』の伝本間で「河

原院」と「六波羅（蜜）寺」という異同があるのも、朗詠注における混同を反映したものであった。『宝物集』が直接典拠にした資料は明らかではないが、確実に『宝物集』以前に成立したと考えられる『和漢朗詠集私注』『和漢朗詠註抄』では、未だ見られなかった要素が『宝物集』の清涼寺釈迦像譚には現れている。同時に、『宝物集』と、『永済注』およびそれを典拠とする『太子伝』二十四歳条では、内容的に最も重要な相違点がある。『永済注』の内容は、『瑞像歴記』に基づいたものであり、奝然が栴檀像を模刻して本朝に持ち帰ったと記されていたが、『宝物集』においては、奝然が栴檀像とその模刻像を取り替えて、栴檀像そのものを将来したという文脈になるのである。[10] 清涼寺の釈迦像が栴檀像そのものであると記す『宝物集』は、栴檀像譚の展開上、極めて重要な位置にあり、その言説は中世に於いて広く喧伝されるようになる。

また、『宝物集』は、「さては二伝の仏にこそおはしますなれ」と「語り手」の感想を述べる。この「二伝」という語彙に関しては、以前拙稿で検討を試みた。[11] その結果、「二伝」とは、生身の釈迦を「一（初）」と見なし、その姿を写した栴檀像を「二」と数えたものであること、すなわち、「二伝」は栴檀像そのものを意味するということが明らかになった。この「二伝」という語は、『宝物集』以降、栴檀像そのものという主張と一体となり、清涼寺釈迦栴檀像に関する言説で散見するようになる。ここで『太子伝』に再び戻ってみると、太子二十四歳条に記される清涼寺釈迦栴檀像譚は、『永済注』の記事と同様、奝然が将来したのは栴檀像の模刻像であったとする説を載せる。そのため、当然ながらこの将来像は「二伝」と表されることはない。一方、太子八歳条では、

①猶滅後の衆生を利せむが為に、御身（＝釈迦）を金銅の聖容に移し留め給き。

とあり、八歳条の釈迦像が、天竺において生身の釈迦を写したものであることを記す。そして、『太子伝』はこの像が「仏法最初の釈迦像」であると結んでいる。また、八歳条では次のようにも述べられている。

②滅後の利生の為に、生身の二伝を移し奉る所の新仏の像なり。

①では釈迦本人の姿を「金銅の聖容」に移し留めたとあり、②は「生身の二伝」を「新仏の像」に移したとある。この二つの文は同内容を表していると考えられる。「二伝」とは、本来、清涼寺釈迦栴檀像に特有の語彙であった。太子八歳条に描かれる金銅釈迦像縁起の内容は、栴檀像譚の文脈を換骨奪胎したものであったため、全く異なる釈迦像に対しても「二伝」が用いられたのであろう。右に見た『太子伝』の記述は、清涼寺釈迦栴檀像譚の「二伝」という語彙が、しかるべく理解され、定着し、他の仏像に対して応用されるまでになったことを示していよう。

また、文保本『聖徳太子伝』八歳条の記事には、続けて補足的な話が二つ付されている。

一、我朝開闢始天照大神御本地事

忝大神宮、於高天原三面ノ銅ノ鏡ニ移留メ我本地ノ御体ヲ、令知末代氏人ニト思食シ、自御体ヲ移留メ銅ノ鏡ニ給ニ、神ノ態ニテマシ〳〵ケレトモ、思様ニ移セ給サリケレハ、第一番ノ御正体ノ御鏡ヲハ、投入紀伊ノ国吉野河ニ給ケルヲ、…第三番ニ思様顕給。御正体ハ百王一百代ノ御重宝、内裏ノ温明殿ニ御ス。内侍所ノ御鏡是也。抑相叶天照大神御意ニ給ヘル、内侍所ノ御鏡面顕給フ真実ノ御正体ト申ハ、聖徳太子御本地救世観音ノ御体也。

一つ目は、三種の神器の一つである内侍所の鏡の由来を語るものである。天照大神は三面の銅鏡に「我本地御体」

を「移し留め」ようとした。最初の二つは思い通りにいかなかったが、第三番の鏡は意に叶うものができた。これが内侍所の鏡である。そして、この鏡の御正体が、（天照大神と）聖徳太子の本地である救世観音であると比定されている。渡邊信和氏[12]は、本話が太子伝において八歳条に配置されていることに疑問を示され、「むしろ太子十歳条のなかに、敏達天皇が皇居を捨てて、鳳輦に乗り、内侍所の鏡と共に稲淵山に逃れたとする記述があるので、その後に載せるのが良いと思われる」と述べられている。確かに、太子八歳条で内侍所の鏡の話が述べられることは一見不審に思える。しかし、ここまで考察してきたことからすれば、八歳条の本文とこの話は決して共通点がないわけではない。太子八歳条は生身の釈迦が栴檀像に自らを「移し留め」た話であり、内侍所の鏡の話は天照大神が自らを銅鏡に「移し留め」ようとした話であった。内侍所の鏡の由来譚が太子八歳条に付された理由には、そのような文脈上の必然性があったと考えられるのではないだろうか。

また、二つ目は、太子八歳条の釈迦像の後日談とも言うべきもので、次のように記されている。

一、仏法最初尺迦像事

治承四年ノ冬ノ比、依テ平家ノ悪逆ニ、南都東大寺・興福寺・諸堂諸院忽炎上ス。瑜伽唯識ノ法門モ悉皆焼払ヘリ、金銅十六丈ノ廬遮那仏ヲ始トシテ、数千万体ノ仏菩薩ノ像一時成リ灰燼ト給シ時モ、此仏像ハ一閻浮提ノ霊仏ニテ御ケレハ、更焼セ玉ハス、多百由旬虚空ニ燃上ケル猛火ノ中ヨリ、放テ金色ノ光ヲ自飛出給ケル也。仏法破滅ノ悲ノ中ニモ貴ケル也。サレハ平家一期ノ盛衰ノ有様物書語ニ伝テ侍ニモ此仏ノ御事ヲ書也。抑興福寺ハ大織冠ノ御息淡海公ノ御願、藤原氏累代ノ氏寺也。東金堂ハ仏法最初ノ尺迦像、西金堂ハ自然涌出観世音ト書連侍ルハ、即聖徳太子八才ノ御

時、始テ従二新羅国一渡玉ケル尺迦像是也。

波線部にあるように、この記事は『平家物語』を典拠とした文を載せている。諸本の中では覚一本系本文が近い。

…興福寺は淡海公の御願、藤氏累代の寺也。東金堂におはします仏法最初の釈迦の像、西金堂におはします自然涌出の観世音、瑠璃を並べし四面の廊、朱丹をまじへし二階の楼、九輪そらにかゝやきし二基の塔、たちまちに煙と成こそかなしけれ。…

（『平家物語』巻五・南都炎上）

興福寺の仏像をめぐる資料には、東金堂の釈迦像を「仏法最初の釈迦像」としたものが散見する。その中には「百済」や「欽明天皇」と関係づけられるものも見えるが（『七大寺日記』等）、これは仏法伝来の時期と重ねて「仏法最初」であることの根拠としようとしたのであろう。

さて、ここで文保本系『太子伝』の叡山文庫本について触れておきたい。叡山文庫本は、宮田氏・中島氏の御論考でも、太子伝と『宝物集』との関わりについて述べられる際に挙げられていた写本である。それは叡山文庫本が『宝物集』と同じく本仏説を採るためであった。この叡山文庫本は、清涼寺釈迦栴檀像譚を太子二十四歳条ではなく八歳条に載せている。『太子伝』内部では、清涼寺の釈迦像が栴檀像そのものであるとすると、文脈上太子八歳条の内容と衝突してしまうことになりかねない。しかし、叡山文庫本は、本仏説を掲げる栴檀像譚を採用し、その眼目である「仏法最初の仏像」という点に引かれたために、栴檀像譚を太子八歳条へと組み替えたと考えられる。

このように、太子八歳条の釈迦像は、他の仏像の由来譚と交差しながら、その起源が語られた。正和三年（一三

一四）成立の法空撰『聖徳太子平氏伝雑勘文』に見られる太子八歳条の注では、『伝暦』の本文「末世尊レ之消レ禍蒙レ福事」に対して、「於二三道宝階一生身先譲二檀像一。汝於二来世一広作二仏事一。云云」とあり、釈迦が栴檀像に先を譲った話が引かれている。栴檀像譚が仏法最初の釈迦像の由来を語るものとして知られている以上、他の仏像は「本朝最初の像」以上の権威付けをおこなうことは本来は不可能なはずであった。『永済注』を典拠とした『太子伝』は、清涼寺釈迦栴檀像譚において、栴檀像の尊さを認めつつも、裔然が将来した像が栴檀像そのものではなく、その模刻であるとする記述を載せている。それによって、一方の太子八歳条の釈迦像は、天竺由来という価値を単独で有することになっているのである。『太子伝』十三歳条には、太子が初めて建立した興厳寺に、善光寺阿弥陀如来像と、八歳条で述べられていた新羅国から献ぜられた金銅釈迦三尊が、仏宝として安置されたと述べられている。この二つが並べて述べられることの意味は小さくない。どちらも最初の阿弥陀像・釈迦像とされ、天竺を起源とするとされる仏像であったのである。(13)

「最初の像」であるとする主張には、仏法史あるいは本朝仏法史の「始発」と関連付けようとする意図がある。太子八歳条に記される釈迦像は、遥か天竺に起源をもつ仏法最初の像であり、かつ、太子の前世から関係のある像とされた。『太子伝』は、太子自身を「和国の教主」として本朝仏法史における始発的な存在と位置づけるのと同時に、釈迦像の価値をも高めようとしたのであった。

おわりに

以上、『太子伝』八歳条に見える「仏法最初の釈迦像」をめぐる記事が成立するまでの過程を考察した。中世の舎

利信仰が生身の釈迦に限りなく近いもの（或いは同体）を対象とした信仰であったように、生身の釈迦の姿を写した（移した）とされる栴檀像は、仏像の中でも格別の価値を付与されていた。そのことを語る文脈、および『宝物集』に見られた「二伝」という語彙は、やがて『太子伝』八歳条において、栴檀像ではない、別の金銅釈迦（三尊）像に応用されるまでになったのである。仏像の由来譚は、ある時は仏法史の中で位置づけられ、あるいは仏法の象徴的聖者と関係し、時に寺院の歴史と絡み合いながら、語られていく。本稿で対象としたのはごく小さな範囲にすぎないが、中世において生じた仏像の起源をめぐる言説について一つの考察を試みた。

注

（1）拙稿「清涼寺の噂――『宝物集』釈迦栴檀像譚を起点として――」（『説話文学研究』三八、二〇〇三年六月）。

（2）『日本書紀』敏達天皇八年条では、「冬十月、新羅遣二枳叱政奈末一進レ調、并送二仏像一。」とあり、送られた「仏像」について釈迦像であるとは明記していない。

（3）藤原猶雪編『聖徳太子全集』第二巻（復刻版）、臨川書店、一九八八年。初版は一九四四年。現在翻刻・刊行されている醍醐寺蔵本を使用した。日光山輪王寺蔵本もほぼ同内容。

（4）叡山文庫蔵『太子伝』は八歳条に引用。この点に関しては、牧野和夫「中世の太子伝を通して見た一、二の問題（2）」（『中世の説話と学問』和泉書院、一九九一年。初出は『東横国文学』一四、一九八二年三月）参照。

（5）高田修『仏像の誕生』岩波書店、一九八七年。

（6）平林盛得「〈資料紹介〉優塡王所造栴檀釈迦瑞像歴記――附西郊清涼寺瑞像流記――」（『書陵部紀要』二五、一九七四年三月）

（7）宮田寿栄「説話の流伝――清涼寺釈迦像縁起譚をめぐって――」（『仏教文学』一〇、一九八六年三月）。中島秀典「『宝物集』における嵯峨清涼寺釈迦像縁起譚の考察――その本仏説をめぐって――」（『緑岡詞林』一〇、

一九八六年四月）。

両論文は、『宝物集』の清涼寺釈迦栴檀像譚を中心に考察され、その内容が朗詠注の影響を受けていることを指摘されている。

(8) この『江談抄』の記事は、次に挙げる別の詩句に対する『朗詠江注』（下・仏事・六一〇）とほぼ同文である。

以仏神通争酌尽　経僧祇劫欲朝宗　弘誓深如海　以言

酌　為朝対用此字様　講時、保胤入道在座見此後、被陳曰、依如是不去文場也、見此句作骨心有攀縁、且為菩提之妨云々。

『江談抄』と『朗詠江注』との関係については、黒田彰「江談抄と朗詠江注」（『中世説話の文学史的環境』和泉書院、一九八七年。初出は『国語国文』五一・四、一九八二年四月）参照。

(9) 注(7)の両論文参照。

(10) 朗詠注でも静嘉堂文庫蔵『和漢朗詠集和談鈔』や国会図書館蔵『和漢朗詠注』になると、夢告によって裔然が像を取り替えたという内容が述べられる。

(11) 注(1)の拙稿参照。

(12) 渡邊信和「覚什『聖徳太子伝記』翻刻並びに釈文（一）」（『同朋学園仏教文化研究所紀要』一一、一九八九年十二月）

(13) 荒木浩「仏法初伝と太子伝――今昔物語集本朝部の構想をめぐって――」（『説話文学研究』二九、一九九四年六月）によれば、『今昔物語集』では、聖徳太子を本朝の仏法の始発として位置づけるために、清涼寺釈迦像や善光寺阿弥陀像に関する記述が敢えて記されていない。『太子伝』においては逆の現象が見られるわけであるが、「二伝」という語が、本来用いられるはずの清涼寺釈迦像に対してではなく、聖徳太子にまつわる釈迦像に対して使用されていることに関しては、類似した原理が働いたと見なすことができよう。

使用したテキスト（注で示したものは省く。）

『本朝文粋』『江談抄』『宝物集』『平家物語』…新日本古典文学大系（岩波書店）。朗詠注…伊藤正義・黒田彰編『和漢朗詠集古注釈集成』大学堂書店、第一巻（一九九七年）第二巻上下（一九九四年）第三巻（一九八九年）。『聖徳太子伝暦』…大日本仏教全書。

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

The Tales of the First Image of the Buddha in the Medieval Annotated Editions of *Rōei-chū* and *Shōtokutaishi-den*

Mayumi NAKAGAWA

In this paper I will consider how stories about the first image of the Buddha were developed in medieval annotated editions.

Shōtokutaishi-den is an annotated edition of *Shōtokutaishi-denryaku*, a chronological record of Shōtokutaishi. *Shōtokutaishi-den* has 'two' tales about the first image of Buddha. The article concerning Shōtokutaishi at age 8 notes that the image of Sakyamuni, which the king of Silla presented to Japan at that time, was the first image created in the world. The account of Shōtokutaishi's 24th year, on the other hand, incorporates another better known story: The first image of Sakyamuni carved in sandalwood was said to have been made by King Udayana in ancient India, and especially worshiped as a visual image of the historical Buddha during his own lifetime. Later it was brought to China, and its replica made and introduced to Japan by Chōnen (938-1016), a priest of Tōdai-ji, and enshrined as the principal image in Seiryō-ji.

The account of Shōtokutaishi's 24th year was based on *Eisai-chū*, one of the many *Rōei-chū*, which are annotated editions of *Wakan-rōei-shū*. *Hōbutsu-shū*, a collection of Buddhist Tales, also contains the King Udayana version. However, it differs greatly from others in that the statue brought by Chōnen is noted as not a new replica made in China but the very statue made by King Udayana. *Hōbutsu-shū* calls the statue "ni-den" or first copy. This term is also used in the account of Shōtokutaishi's 8th year in *Shōtokutaishi-den*, which, as I aim to demonstrate, tried to make textually compatible the two different origins stories while giving primacy to the one recorded in the 8th year account. Furthermore, the story in this account was used as the origin of a Sakyamuni triad at the East Golden Hall of Kōfuku-ji. I hope to make clear the process by which the more elaborate and manifold variations of the tale were created in medieval Japan.

キーワード：朗詠注　『聖徳太子伝』『宝物集』「二伝」